



中山晴奈×「アーツであう、アートでむすぶ in まえばし 2015」Bコース受講生
〈上毛電鉄 ごちそうアートトレイン〉

アートに限らず、ものづくりや表現活動を行ってみたり、イベントを企画してみたり。クリエイティブな何かを自分たちの手で生み出すのは楽しいことですよね。アーツ前橋やそのまわりで起こっている出来事に目を向けてみると、この土地を訪れたアーティストが活動・作品発表しているだけでなく、そこに楽しく参加している人たちがいたり、一方では市民主体のイベントが盛り上がっていたりもしています。どちらもつながっていて刺激を受け合う状況が生まれているので、創造的な市民活動＝クリエイティブ・コミュニティ(CREATIVE COMMUNITY)として、一緒に紹介します。

Contents

Feature

関わりながらアートマネジメントについて学ぶ
「アーツであう、アートでむすぶ in まえばし 2015」
気軽に聞ける生演奏でアートと音楽をつなぐ「ロビーライブ」
みんなでつくる芸術文化祭「前橋まちなか文化祭(まちフェス)」
映像と光で建物を彩る「あかりプロジェクト」

Works

コミッションワーク：Off-Nibroll 《いつもの時間》

Column

アーティストコラム：山城大督

Report

「ここに棲む ― 地域社会へのまなざし」展

Information

2016年3月～9月の展覧会スケジュール

1 関わりながらアートマネジメントについて学ぶ「アーツでであう、アートでむすぶ in まえばし 2015」(群馬大学連携)



Aコース：紙粘土とストローで高いタワーを作る「つなげて つなげて」というワークショップ。簡単そうに見えて意外に難しい、スカッとしない気持ちの体験も意図された企画。

2015年6月から2016年3月までの9カ月にわたって、群馬大学教育学部・茂木研究室による、アーツ前橋と連携したアートマネジメントを学ぶプログラムが文化庁の支援のもとで行われました。集まったのは、多様なアート活動を生み出し・支える「アートマネジメント」に興味を持つ人だけではなく、3人のアーティストが掲げたそれぞれの実践テーマに共鳴し、現場に関わりたかった人、前橋のまちを元気にしたいと考えている人など。属性も学生から会社員、教員、主婦の方など、年齢も様々な43人が、スタートアップの講座の後に、ABCの3つのコースに分かれて、それぞれを担当するアーティストと共にアートプロジェクトやワークショップの企画運営、鑑賞アプリの開発などに取り組み、成果発表やその活動意義について考える締めの講座で9カ月の振り返りをしました。

それぞれに活動を振り返るなかで見えてきたのは、実践の体験も、関わり方やその度合いも、感じている活動の意義も多様であるということ。アーティストの活動の性格が反映されるのか、実践の進め方も3コースそれぞれでした。普段から前橋で活動する中島さんのコース(A)は、基本ゆっくりマイペースに、時には瞬発力がかかちをつくる。中山さんのコース(B)は、大きな目標に向かいチームワークの力で一気に事をすすめる。山城さんのコース(C)は、とにかくまず、自分たちが何を目的にしている、アートとは何なのかを語りつくしてみる、などなど…。参加するさまざまな人の姿と、それぞれのアーティストが中心



Aコース：身体の不思議なところや面白いところを見つけるワークショップ「カラダふしぎ発見!」



Cコース：プログラマーの林洋介を交えてアプリ制作を学びながらも、ディスカッションに多くの時間が費やされました。



Bコース：上毛電鉄に乗りながら楽しむことのできたイベントは満員御礼!参加者が楽しむ姿に手応えありの1日でした。



山出淳也、上田假奈代、小田井真美らをゲストに招いて行った「スタートアップ・アートマネジメント基礎講座」

となつて生み出される風景の違いは、そのままアートが持つ多様な可能性を感じさせます。ここで集まってきた人それぞれが、このプログラムをきっかけにしてアートについて考え、自分たちなりの活動に取り組み、同じ時間を過ごす仲間たちと対話を重ねること、43人分のアートのあり方、とえられ方が生まれたのではないのでしょうか。そしてそれぞれが、これから前橋でどのように自分たちなりの活動をしていくのか。その広がり可能性に心が躍ります。次年度も、引き続き基礎的な講座や実践に加えて、応用的な講座を計画中です。(平成28年度 大学を活用した文化推進事業 美術館等と連携する地域アートプロジェクトを活用するアートマネジメント人材育成研修申請中)

2 気軽に聞ける生演奏でアートと音楽をつなぐ「ロビーライブ」



アーツ前橋で、生演奏を楽しむことができるのを知っていますか。南エントランスを入ってすぐ左手、総合案内前からショップ側へと抜けていく、大きな窓に面した開放的なスペース。ここで不定期に、小さな音楽ライブが開かれています。「美術だけではなく、音楽にもアプローチをしたい!」(家入健生・アーツ前橋 学芸員)との思いから企画されたこのロビーライブがはじまったのは2015年11月。過去4回にわたってポップス、ジャズ、エレクトロニカと多様なジャンルの音楽を紹介してきました。1回の演奏時間は30分程度と短いので、ふらっと訪れた人も気軽にライブを味わうことができます。コーディネーターとしてイベントを企画するのは、県内で様々な音楽イベントに携わっている岡庭涼さん(第1,3回)と鈴木伸一さん(第2,4回)です。

岡庭さんは、昼は金型の機械設計、夜はDJとして音楽イベントを企画しています。開館前のコンサートの企画に関わったのを縁に、コーディネーターをつとめることになりました。詳しいジャンルでもある、ポップスとエレクトロニカを担当しています。一方でアーツ前橋からほど近い商店街のカバン屋さんのご主人鈴木さんは、過去2回ジャズを担当。第4回では、ご自身もサクソ奏者として、「ジャズスフレ」のデュオで出演しました。ロビーライブの他にも、前橋市内で複数のイベントに携わっています。このライブをきっかけに音楽ファンが初めてアーツ前橋を訪れたり、また展示を目当てに来た人がお気に入りのミュージシャンを発見したりと、地元のコーディネーターの活躍によって、アーツ前橋に新たな人と芸術の交流が生まれています。



コーディネーター 岡庭 涼さん

第3回のライブでは、エレクトロニカの音で館内が居心地のいい、リラックスした空間へと変化するのを感じることができました。前橋には実はあまりバンドや電子音楽奏者が発表する場所がないので、ロビーライブは地元のアーティストにとっても、貴重な機会になっています。お客さんにはこれまで聴いたことがなかったジャンルの音楽にも触れていただいて、リフレッシュした気持ちになってもらえたらいいですね。

企画への思い

ジャズ界の巨匠や海外でも活躍する新進気鋭のアーティストなど、思いがけない大物が参加してくれました。偶然訪れた人でもこうしたクオリティの高い音楽を聴くことができ、非日常な世界に浸ることができるというのがこのロビーライブの大きな魅力じゃないかと思っています。演奏者の息遣いまで伝わる生演奏ならではの迫力を、ぜひ体感してほしいです。



コーディネーター 鈴木 伸一さん

4 映像と光で建物を彩る「あかりプロジェクト」



※ 2015年12月5日(土)から2016年1月12日(火)まで実施

「もしも建物が人格をもっていたら、どういうことを話そうでしょうか?」

2014年に引き続き、2回目の開催となったあかりプロジェクトでは、こんな問いかけのもと、アーツ前橋の壁面に浮かび上がった顔が通りに向けて語りかけるといった斬新な試み《たてもののおしばい》が行われました。ダイナミックな映像と光の作品を創り出したのはアーティスト高橋匡太。高橋による《たてもののおしばい》は「スマートイルミネーション」という横浜のイベントでも行われた取り組みです。しかし、建物がしゃべり出す、というコンセプトはそのままだに、「おしばい」の中身はまったく新しいものになりました。

前橋在住の脚本家、小出和彦が書き下ろした物語は「たてもの」が、たどってきた歴史や周辺地域の変遷を語ります。ローカルな場所への視点とユーモラスな中にも郷愁がにじむ語り口は、地域で活動してきた脚本家だからこそのものです。

群馬県出身のこばやしけん太とさくらわに子が出演者として加わり、地元の照明会社が制作として協力するなど、前橋周辺にゆかりのある人々の協力によってできあがった2015年のあかりプロジェクト。歓声から驚きの声まで、通りがかる人々の様々な反応が、冬の間アーツ前橋の館外を賑わせました。

ワークショップでまちを彩る「ひかりの実」も開催

3 3人のアーティストによる、3様のコース



Aコース：中島佑太

〈まえばしでこどもワークショップをじゅんびするじゅんびしつ〉他館の教育普及活動や、ゲストアーティストによる事例にも学びながら、アーティストが手がけるワークショップのありかたや可能性についての理解を深め、受講生自らが子ども向けのワークショップの企画、シミュレーション、実践に取り組みました。幼稚園などで数度の実践を積み、最後はアーツ前橋が普段から提供している教育普及プログラム「あつひろば」の舞台を活用して、予算(材料費)を0円で、企画運営も1人で行うなど野心的な設定で対応力が鍛えられたようです。



Bコース：中山晴奈

〈フードアートスクールまえばし・「食」をアートに変換する講座〉赤城山南面を走る上毛電鉄に「ごちそうアートトレイン」を走らせる、という参加型のイベントへ向けて、受講生の間で議論を出てきた「五感」「非日常」「みのり」「つなぐ」などさまざまなキーワードを元に提供する料理や演出を検討し、広報や運営も一丸になって取り組みました。普段は気づかない、地域にある魅力的な食料や素敵なお店のフードなどをビジュアル化し、イベントを通して前橋の魅力を再発見・共有しました。



Cコース：山城大督

〈鑑賞アプリ開発プロジェクト・アーツ前橋をみる・かたる〉アートの「見かた」について考えたり、考えたことを言葉にするワークショップを重ねたりしながら、アーツ前橋のオリジナル「デジタル・ミュージアム・ガイド」をつくってみようという試み。1月にはそのプロトタイプの実験会を行いました。「ガイド」ではなく、「体験型ウォーミングアップツール《folks/フォークス》」と銘打たれたiPadアプリから提供されたのは、アーツ前橋館内の展示ガイドではなく、館内外を歩きながら、普段は見過ごしがちなさまざまな感覚を呼び起こす体験型作品のような時間でした。

3 みんなでつくる芸術文化祭「前橋まちなか文化祭(まちフェス)」



寺澤事務所・工房「テラ・アユ・ナツのPOP-studio」



Maebashi Works パフォーマンスイベント

アーツ前橋が誕生して1年が経つにあわせて、2014年に第1回が開催された、前橋まちなか文化祭(通称:まちフェス)。第2回を迎えた2015年は20団体が参加し、10月24日(土)と25日(日)の2日間、前橋の中心市街地を盛り上げました。このまちフェスは「みんなでつくる芸術文化祭」というコンセプトで、パフォーマンスや作品展示、トークイベントを含む企画の全てが、一般公募で参加した団体によるものです。そのため、参加者は県外で活躍するプロ集団から、地元でささやかに活動する集団までさまざま。企画者や参加者の年代も子どもから大人まで実に幅広く広がっています。寺澤事務所・工房による絵描きスタジオには多くの子どもたちが参加。県立前橋商業高等学校吹奏楽部は、商店街に散らばっていた高校生たちが突然演奏をはじめ、最終的にはステージに集まって合奏をするというフラッシュモブで、まちなかを沸かせました。また、舞踏団 トンデ空静やMaebashi Worksによる本格的な路上パフォーマンスには、年配の方から子どもまで多くのお客さんが足を止めました。中心市街地のエリアに各イベントが点在しているため、ひとつの会場からまた次の会場へ、参加者はまち歩きと共にイベントを楽しむことができるのも、まちフェスのいいところです。

アーツ前橋・サポーターの視点

さまざまなイベントや運営をお手伝いするボランティアスタッフのことをアーツ前橋では「サポーター」と呼んでいます。館内での展覧会やワークショップだけではなく、地域を舞台にひろがるアートプロジェクトなど多岐にわたるアーツ前橋の活動を支える、大事な役割を担っています。その活動の魅力や、サポーターとして1年以上、週に1度は必ずこの活動のために前橋まで足を運ぶというサポーターのひとり、石倉さんに伺いました。

Q.具体的にどのような活動をしているのですか?

A.週に1度、アーカイヴスペースの整理をしています。また、次の展覧会が始まる前には広報物の発送作業という大仕事も。月1程度でやっているワークショップ「あつひろば」のサポートから、子どもたちや来館者への鑑賞サポートをしているサポーターもいますね。私は館外プロジェクトの〈風の食堂in粕川〉では受付を担当していました。また以前はサポーターのみんなで「前橋アートスペースマップ(My Mae Map)」を作ったこともありました。

Q.登録したきっかけは何ですか?

A.もともと美術館に行くのが好きだったことと、あとはこの建物がデパートだったので若い頃によく来ていたので興味を持って。自分の仕事と全然違う世界を覗いてみるのも面白そうだな、とそんな気持ちでアーツ前橋のアートスクールに通い始めたのが大きなきっかけでした。それからお手伝いなどをしていううちに、仕事を頼まれることも増えて、サポーターとして関わるようになっていました。

Q.活動を続けているのはどうしてでしょう?

A.一番の理由は面白いから、ということでしょうね。私は技術系の仕事をずっとしてきたから、美術館で働いているような文科系、芸術系の人たちとはこれまで接する機会がなくて。サポーター同士で話し合いをするときに「それは理系の考え方だね」と言われたことがありました。ここでの活動は、人や物との新しい刺激的な出会いが多くて、私自身多くの気づきをもたらしています。



サポーター 石倉 康行さん

Off-Nibroll 《いつもの時間》



展示を見たら、1F奥のカフェでひとやすみ。すると入口手前のスクリーンからはビッピビ ポーンと時報の音。それとともに、流れ始めた映像。こちらもアーツ前橋のコミッションワーク（委託制作）のひとつとしてOff-Nibrollが制作した作品《いつもの時間》です。

Off-Nibrollは振付家の矢内原美邦と映像作家の高橋啓祐による、ユニット。身体と映像がつくりだす関係性を追求するために立ち上げられ、劇場だけにとられないスペースでのパフォーマンスや、インスタレーション作品を発表しています。この作品は、開館前のプレイベントとして行ったワークショップに参加した人たちがまちななかで出会った人たちが色々な動作やダンスをする様子を映像として撮影し、それがアーツ前橋に設置される時計として機能する映像作品として仕上げられたものです。

身体のどこかを叩いたり、何かを受け取って渡したり、という動作によって秒が刻まれることもあれば、矢内



原さんや、ワークショップのダンスチームによる数分間のダンスが流れることも。

時間の知らせかたも、ただ現在時刻を報じるのではなく、参加者の個人的な出来事や、あるいは戦争や震災が終わってからなど、社会の大きな出来事が起きてからどれだけの時間が経ったのかが伝えられるようになっています。

誰もがその歴史のうえに自分があるのだと認識できる出来事と、一方で他の人の人生には全く関係がないような些細な誰かの記念日が同じ重みを持って報じられるこの時計。数分ごとに流れるその映像をじっとみつめていると、みんなの時間、そして誰かの「いつもの」時間の積み重ねのうえに今ここにいる自分はあるのだと感じることができす。

参加した人固有のリズムと個人や社会の記憶が刻まれたこの時計の前で、みなさんも過去の自分と未来の時間へ、思いを馳せてみませんか。

山城大督 | YAMASHIRO Daisuke

「アーティストのおすすめ○○」を聞くこのコラム。今回は、特集でご紹介した「アーツでであう、アートのむすぶ in まえばし 2015」に参加している美術家・映像ディレクターの山城大督さんに「音楽」をテーマにいただきました。出てきた答えは…

こんにちは。アーティストの山城大督です。僕がおすすめしたい「音楽」アイテムはこちら。

「ノイズキャンセリング・ヘッドフォン」。「映像」という時間を創造する仕事から、作業に「とことん集中&没頭する方法」を探し、はや数年が経った。作業を深夜にしてみたり、お気に入りのミニマルな音楽を聴きながら作業してみたり、メガネをはずしてみたり…。

結果、どれも満足には至らなかった。そんな僕が2015年に出会ったのが、「ノイズキャンセリング・ヘッドフォン」だ。ヘッドフォンを装着すると外音が遮音されるという音響機器で（周囲の雑音をマイクで取り込んで逆位相の波をスピーカーから発することで、音波同士が打ち消し合いノイズが消える。ある程度の人の声や周りの雰囲気は聞こえる）、音楽を良い環境で聴きたいなと気軽な気持ちで手にとってみたわけだ。

新しいアイテムを手に入れ、音楽ライフを楽しんでいた。そんなある日。音楽を再生をさせずに「ノイズキャンセリング・ヘッドフォン」を装着してみた。すると、スッと周りの音が消え（音が軽くなったという言い方が適切かも）、目を閉じると空白の空間に自分だけがいるような、そんな気分になった。

この体験を通して気がついたのは、思っている以上に人間にとって音環境は心理的な抑揚に強い影響を与えていることだ。窓の隙間風が鳴らす高音、エアコンのモーターが鳴らす小さな低音、それらによって、ほんの少しだけけど、人間の耳や脳は音を聞こえないふりをするために掻き消そうとサワサワと心を動かしているのだ。僕たちの身体にはそういう繊細な知覚や微細な心理動向が備え付けられている事をあらためて知ることになった。

思考に集中したい、あなた。「ノイズキャンセリング・ヘッドフォン」をおすすめします。自分で自分の知覚をハッキングすることで、新しい自分の能力に出会えますよ。

1983年大阪生まれ。名古屋在住。美術家、映像ディレクター、ドキュメント・コーディネーター。映像の時間概念を空間やプロジェクトへ応用し、その場でしか体験できない《時間》を作品として展開する。「Nadegata Instant Party（中崎 透+山城大督+野田 智子）」メンバー。2015年度より、群馬大学とアーツ前橋と連携し鑑賞ガイド《folks / フォークス》を開発するプロジェクトを市民と共に進めている。

Report

展覧会・イベントレポート

「ここに棲む ― 地域社会へのまなざし」展



藤本壮介《森／建築》

誰もがあたりまえに日々実践している、棲むということ。それを掘り下げて、私たちのこれからを考える展覧会「ここに棲む ― 地域社会へのまなざし」展が2015年10月9日（金）から2016年1月12日（火）の期間、アーツ前橋で開催されました。

いまという時代は、物質的・経済的豊かさを求めることとは異なる価値観を人々が大事にし始め、地域社会を見直す転換期を迎えていると言われます。一方で高齢化や自然との共生など、どんな場所に住居を構えようとも、避けては通れない課題も同時に存在します。そうした時代と向き合い、地域に棲まうことについて、この展覧会では美術と建築の二つの領域から考察が行われました。

会場内に立ち現れる、どこか妖しく幻想的な空間は美術家の三田村光土里によるもの。映像とインスタレーションを用いて再現された《ルナパーク》は、前橋市に残る「なばあく」より着想されました。かつて20世紀初頭に世界中に建設された遊園地のイメージであり、そこに



ツバメアーキテクト《新しい家から学ぶ》

私たちは、高度経済成長期に建設されては廃れていったたくさんの街並を重ねて見ることができました。

建築家、藤本壮介が提案するのは「森のような建築」。48本の木と根元にある椅子によって構成された空間の中はどこの道も直線にはならず、また座る位置で光の入り方や視線の行く先が異なるようにつくられています。来場者は移り変わる景色の変化を感じながら、まるで森を散歩するように木と木の間を縫って歩くことができました。

関連プログラムも多数行われ、10月31日（土）には、「地域主義的！近現代ケンチクツアー」として、前橋工科大学学長の星和彦、同大学教授の石田敏明による、建築ガイドツアーが行われました。まちにある建物をつくった人のことから、都市の移り変わりや近代以降の建物を保存する運動の歴史的な背景まで。「知っているつもりでいたまちの知らなかった新しい顔が見えてくる！」と、建築を仕事にしている方だけではなく、親子でご参加いただいた方にも大好評のイベントとなりました。

Information

展覧会スケジュール

Art Meets 03 石塚まこ／康(吉田)夏奈

2016年3月19日（土）▷ 5月31日（火）

田中青坪 永遠のモダンボーイ

2016年3月19日（土）▷ 5月17日（火）

コレクション展

2016年6月9日（木）▷ 7月12日（火）

コレクション+展

2016年7月22日（金）▷ 9月25日（日）

表現の森展（仮）

2016年7月22日（金）▷ 9月25日（日）

アーツ 前橋

ARTS MAEBASHI

〒371-0022 群馬県前橋市千代田町5-1-16
TEL:027-230-1144 / FAX:027-232-2016

www.artsmaebashi.jp

ROBSON COFFEE ARTS MAEBASHI [ロブソンコーヒー アーツ前橋]

営業時間 11:00～20:00（日は19:00まで）

定休日 水・年末年始

TEL 027-233-3005

ミュージアムショップmina（ミーナ）

営業時間 11:00～19:00

定休日 水・年末年始

TEL 027-289-8094